

令和二年十一月一日発行  
通巻一五五号(毎月一回一日発行)

# 京鹿子

# 百寿



11月号

鈴鹿呂仁  
拾掬集 その六十二



待宵のあえかな灯り仕付け糸  
顛末に消ゆる言の葉秋扇  
捨扇開かず君のぬ窓辺  
蚯蚓鳴く噂の主は天の夫  
ちらつかす妻の切り札鴉の朝  
横やりは風のきまぐれ鬼の子鳴く

こすもす靡く雲黙りを通す  
青ふくべ官邸前のぶら下がり  
凶鑑より這ひ出したるや虫の闇

梨木神社吟行

萩くくる一句一首に一休み  
俳系の百年きざむ萩の道  
秋の宮草かんむりを授かりて  
萩乱る三連休を一括り  
秋うらら和菓子みそ屋と御所廻り

近詠

和田 照海



とびしま

差し潮に鶴の島より西瓜舟  
とびしまの海よりも濃き一重草  
島長の追伸ほどの檸檬の香  
一弦琴いざなふごとく須磨の月  
蝮干す軒に一番星ともる

近詠

松本 鷹根

萩咲けり

毛虫這ふ色鮮やかに嫌はれる  
荒波に軒研ぐ御堂夕野分  
沈黙を夜長に委ね歳を秘す  
栗熟るる裏校庭の梢陽に  
萩咲けり巨岩垣根の垂れ仰ぐ

— 近 詠 —

塩貝 朱千



## 星月夜

かごめかごめ夢の継ぎ目に夕焼雲  
ああ言へばこうは返らず夕蝟  
妖精と遊んだ帰り麦わら帽子  
からめ手も瀬音風音嵯峨晩夏  
無数から一つを探す星月夜

## 英華採集

夕暮れの端を引き来る黒揚羽

岡 山 佐藤 千恵

夏の最中を翔び廻っている蝶。些か不気味に感じるのは、春によく見かける紋白蝶と違ってあの大きな姿、形に加えて色の黒に起因する所であろう。その黒揚羽が夕方庭にやって来て隅から隅へ一日の終りを楽しむかのように遊んでいる様を夕暮れの端を引つ張っていると捉えた感覚がよい。それは、恰も緞帳を引き今日一日の幕を閉める歌舞伎の黒子の役を黒揚羽が担っていると見ると実に楽しい。

八月の涙はいつも潤れてゐる

福 山 林 すみ

一月から十二月の中で八月の季語は重く、特別な月として見る人が多い。日本国民にとって決して風化してはならない長崎・広島への原爆の投下は、原爆忌という季語により詠み継がれてきている。掲句は、日本人の心の奥底に深い悲しみに溢れ溜められている涙が裏側にある事を表側が「潤れている」と表現することで言い表している。

ででむしや確と門限言ひ渡す

福 山 政 時 英 華

昭和の時代がだんだん遠のいていく昨今、各家庭で門限が決められるのは高校生と未成年の大学生ぐらいであろうか？掲句は、今年大学に入学して漸く慣れた学校生活に気の緩みだす女の子に対してご両親がきつぱりと釘を刺した感がある。あちらこちらとフラフラ彷徨う「ででむし」と取合せることによって俳味のある一句へと成し得たと言える。

神無月 沼田巴字

松籟の宮へと詣づ神無月  
 天空を突き刺す梢冬に入る  
 古き世の警世の書や文化の日  
 苦しみ多き女の一生石路の花  
 死せし児の魂いづこ冬に入る

一 望 丸井巴水

太陽が真上の暑さ意気地なし  
 裏町は猫の縄張り鰻焼く  
 狐火がゆらぐ古郷の湯元宿  
 一望は花の丘陵風涼し  
 天にすむ星にも寿命残暑なり

秋夕暉 植村蘇星

すすき穂に掃かれ天空綾にしき  
 夕ざるる一息仕事風は秋  
 近景のありて遠景秋夕暉  
 秋深む先人曰く時は金  
 先哲の言の葉重し秋の暮

出穂のころ 北川孝子

ひとつ灯におもかげのゆれ秋扇  
 正論のすこし脆くて出穂のころ  
 汗拭いて考へる歩のまた一步  
 昭和へと話のもどる秋扇  
 待宵の猫ゆつくりと裏返る

ミニトマト 直江裕子

曲がらねば曲がつてしまふ唐辛子  
 じんかんの隔たりに摘むミニトマト  
 炎天に決して過去にはならない木  
 老いながら逆らいながら遠銀河  
 大夕焼け怖れの中にある安堵

心当り 高木晶子

いざとなれば祇園囃子を響かせる  
 浴衣着て静かすぎたる京の町  
 唐櫃に封印をして迎ふ夏  
 蜜豆や生老病死隣席に  
 各々に心当りの雷ひびく

重き暑気 伊藤希眸

ひとりゐて潰されさうな重き暑気  
 町並を音立てて灼く夏の果  
 妣の歳一つ越したる素秋かな  
 唐黍の粒の整列焼かれゐる  
 日めくりの八分ほど減り稲穂垂る

置き手紙 奥田筆子

アスパラガス卒塔婆そのうちかすみ草  
 いつかは壊れる空蟬の置き手紙  
 浮人形脈絡もなく浮いて来る  
 水蜜桃沈黙といふ不発弾  
 一頭と数へててふてふ重くなる

# 神麓集

木の実落つ 井上菜摘子

躑をたたんで天の川ぶらり  
秋の蝶水捌けのよきあひだから  
どんぐりを拾ふだれかのお祖母さん  
小面のうらの野分に立ちつくす  
言葉の中のことば探れば木の実落つ

月ごろも 村田あを衣

待宵の影ゆらしみる宿の鯉  
待宵や夢二館に灯が仄と  
秘めやかに鯉まとひたる月ごろも  
せせらぎは恋歌ときき居待月  
十三夜こころ返しの滲む文



## 京鹿子集

### 鈴鹿呂仁選

ひまはりの高さで宇宙と交信す 京田辺 山中志津子

真実は主張せぬものラムネ玉

苦瓜を育てて友は慎重派

長梅雨のどこに打とうか句読点

ゆっくりと近づく蜘蛛の常套句

夏つばめ手書きの頃の図書カード

夕かなかな最終バスに母連れて

秋立つやアールグレイの香の中に

ほそぼそと繋ぎし家業生身魂

小太りは我家の家系茄子の馬

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

羽いちまい野鳥の森の晩夏光 城陽 鷺山 珀眉

夜の秋ワイングラスにのこる色

さよならのあとの線香花火かな

マスクメロン当たり障りのない返事

大西日都市空間の曲がり角

一卓にひと隔てたる短き夜 福山 亀井 福恵

一芸に徹し苦瓜ぶらさがる

この一樹乱のごとくに蝉しぐれ

ほまち田の自分免許の長茄子

サイダーをごくごく体内液化化

村中の音の消えゆく炎天下  
福知山 西村 白桴

まくなぎやちろちろ小さな嘘をつく

昼顔や鍵穴むかうは荒ぶ風

懸命に祈りの読経蝉しぐれ

古墳山昔ばなしの風涼し

真夜の閑ナースは光る水中花  
高 槻 安田 優歌

海鳴りて山は沈黙夜の秋

玻璃すべるががんぼ此の世ままならず

父母のなき故郷は他郷ほほづき熟る

をんな三人寄れば青春鬼灯市

十葉の花びつしりと庭の黙  
京 都 菊池 和子

感情のもつれなどなき水中花

落し文そのむね空に言ひそびる

紫陽花の打たれ強さや雨読の日

打ち水のあと盛塩の京あかり

洛中囃裏を返せば梅雨の底  
大 阪 本郷 公子

逆引きの辞書を播く夜の秋

みんなの泡沫の夢聚楽第

蠅虎走るクライマックスシーン

初さんま母の夕餉の手際良さ

夕暮れの端を引き来る黒揚羽  
岡 山 佐藤 千恵

殉教の島に雲湧く花カンナ

聞き耳をとがらせてをり秋扇

靴底の砂をこぼして風晩夏

八月の涙はいつも涸れてゐる  
福 山 林 すみ

荒梅雨や黄身崩れたる目玉焼

手は止まり心はゆるる扇子かな

嬰の声言の葉になり夏燕

でむしや確と門限言ひ渡す  
政時 英華

ねんごろに我が分身の髪洗ふ

あきらかにくちなは見しと子の告げり

夏燕シートベルトが身を縛る

鉢の世話友に頼まれ秋麗ら  
アリソナ 伊吹 之博

父逝きてまた思ひ出す夏休み

独り言止めれば無音夜半の秋

